

「信仰」というギフト

丸山 勉

【聖書】ローマの信徒への手紙 1:1～7、16～17

キリスト・イエスの僕、神の福音のために選び出され、召されて使徒となったパウロから、この福音は、神が既に聖書の中で預言者を通して約束されたもので、御子に関するものです。御子は、肉によればダビデの子孫から生まれ、聖なる霊によれば、死者の中からの復活によって力ある神の子と定められたのです。この方が、わたしたちの主イエス・キリストです。わたしたちはこの方により、その御名を広めてすべての異邦人を信仰による従順へと導くために、恵みを受けて使徒とされました。この異邦人の中に、イエス・キリストのものとなるように召されたあなたがたもいるのです。— 神に愛され、召されて聖なる者となったローマの人たち一同へ。わたしたちの父である神と主イエス・キリストからの恵みと平和が、あなたがたにあるように—。

わたしは福音を恥としない。福音は、ユダヤ人をはじめ、ギリシア人にも、信じる者すべてに救いをもたらす神の力だからです。福音には、神の義が啓示されていますが、それは、初めから終わりまで信仰を通して実現されるのです。「正しい者は信仰によって生きる」と書いてあるとおりです。

「二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいる」(マタイ 18:20)。今ここに、私たちの交わりの真ん中に復活の主がおられます。その主からの語りかけをご一緒に聴きたいと思います。

今日から『ローマの信徒への手紙』を開きます。ご一緒にここから福音の言葉を聴くことが出来ること、何だかワクワクします。『ローマの信徒への手紙』は、丸で大伽藍の建造物のようで、そこにはかっちりとしたキリスト教神学が書き連ねられ、難しそうだという印象を持たれがちですけれども、決して難解な書物ではないと思います。この書物は、パウロという人の“手紙”です。手紙の受け取り手として一番大切なことは何でしょうか？ 書き手の“心”を聴こうとすることではないでしょうか。分析することは二の次、三の次です。使徒パウロが何としてでも書きたかったその思いをご一緒に受け取りたいと思います。

『ローマの信徒への手紙』は「キリスト・イエスの僕」という言葉から始まります。この手紙の著者・パウロの自己紹介の言葉です。彼は自分の「キリスト・イエスの“僕”」だと言い切ります。“僕”とは聞こえがいいですけれども、**要は奴隷とか、捕われ人、といった言葉**です。今は4月で新しい環境を与えられた方はどこかで自己紹介をなさると思います。私という人間を知ってほしい。これだけは言いたい。私たちだったらどうでしょうか？ パウロはローマの教会の信徒に向かって自分のことを告げる時、言いたいことはハッキリしていたんです。私は、「キリスト・イエスの僕」！それ以外ではないのだ、と。自分の生まれ故郷も家族構成も世間的な肩書きも何も申しません。「ただキリスト・イエスの僕なんだ」と。何故でしょうか。それが彼の「誇り」だったからです。

16 節に「わたしは福音を恥としない」という言葉がありますけれども、言い換えれば、福音こそが私の誇りそのものだ、ということです。パウロにとって「福音」、すなわち喜びのおとずれとは、イエス・キリストご自身です。この地上に来られ、十字架で死に、三日目に復活された主イエスその人です。1 章 2 節から 4 節にある通りです。しかしパウロはその福音をはじめは誇らしく思うどころか、逆にそれこそ「恥」だと思っていたのです。あのイエスが神の子などというのはたわ言だと。彼は、実は、福音をいわば思いがけない仕方で、神からの一方的な贈り物として与えられたのです。この贈り物＝ギフトは、実はそれまでの彼を木端微塵にしました。16 節「わたしは福音を恥としない。福音は、ユダヤ人をはじめ、ギリシア人にも、信じる者すべてに救いをもたらす神の力だからです。」とありますように、パウロは、あのダマスコへの道行きの中で神の力に打たれました。使徒言行録の 9 章に記されている物語です。パウロは、無宗教な人間ではありませんでした。むしろ自分たちこそが旧約聖書が伝える真正の信仰を受け継ぐユダヤ人であり、また私のその神の掟である律法の専門家だ、その知識は誰にも引けを取らないとっていました。熱心な宗教家であったわけですが、この宗教家と云うのが曲者です。いわゆる「宗教」のもつ悪魔的な力と言っているものがあるように思います。それは、現代の世界でもそうですね。自らの立場を絶対化し、他のあり方に対して排他的になってしまいます。ヘイトです。以前のパウロ(当時はサウロ)も、熱心なユダヤ教徒として、イエスを神の子と信じ、その群れがどんどん多くなってきたクリスチャンたちを迫害していました。こういう輩は投獄されねばならない、殺されねばならないと、口語訳聖書では「殺害に息をはずませ」とさえ書かれています。使徒言行録 9 章ではその後でこのように記しています。2 節以下です。

「(サウロは)ダマスコの諸会堂あての手紙を求めた。それは、この道に従う者を見つけ出したら、男女を問わず縛り上げ、エルサレムに連行するためであった。ところが、サウロが旅をしてダマスコに近づいたとき、突然、天からの光が彼の周りを照らした。サウロは地に倒れ、「サウル、サウル、なぜ、わたしを迫害するのか」と呼びかける声を聞いた。「主よ、あなたはどなたですか」と言うと、答えがあった。「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。起きて町に入れ。そうすれば、あなたのなすべきことが知らされる。」…サウロは光に打たれ、目が見えなくなりました。三日間盲目にさせられたのです。活動停止です。この間彼は何をしていたのでしょうか。この倒れたサウロを訪ねる役目を主から与えられた人物にアナニアという人がいますが、主はアナニアにこう言っています。「主は言われた。「立って、『直線通り』と呼ばれる通りへ行き、ユダの家にいるサウロという名の、タルソス出身の者を訪ねよ。今、彼は祈っている。」(使徒 9:11)。今、サウロは祈っている、と。この沈黙の中の祈りが彼を変えました。私は想像するのですが、サウロはこの時、あの、自分もまたその殺害に賛同していた主の弟子ステファノの最期の時を思い起していたのではないのでしょうか。最高法院の場で大胆に神の救済の歴史を語ったステファノは、その場に集まっていた人々の怒りを買って、暴力で殺されてしまいました。その箇所を少しお読みします。使徒 7:54 からです。「人々はこれを聞いて激しく怒り、ステファノに向かって歯ざしりした。ステファノは聖霊に満たされ、天を見つめ、神の栄光と神の右に立っておられるイエスとを見て、「天が開いて、人の子が神の右に立っておられるのが見える」と言った。人々は大声で叫びながら耳を手でふさぎ、ステファノ目がけて一斉に襲いかかり、都の外に引きずり出して石を投げ始めた。証人たちは、自分の着ている物をサウロという若者の足もとに置いた。人々が石を投げつけている間、ステファノは主に呼びかけて、「主イエスよ、わたしの霊をお受けください」と言った。それから、ひざまずいて、「主よ、この罪を彼らに負わせないでください」と大声で叫んだ。ステファノはこう言って、眠りについた。サウロは、ステファノの殺

害に賛成していた」。

パウロは盲目にされ、自分と向き合い、祈る三日間の中でこのステファノの姿を思い起さずにはいられなかったと思います。「主よ、この罪を彼らに負わせないでください」という彼の最後の言葉と、丸で天使のような彼の輝く顔。自分はこれまで懸命にユダヤ教の律法を絶対的なものとし、それに異を唱えるものを排斥し、殺害にさえ手を貸してきた。そんな自分はこれまで「主よ、この罪を彼らに負わせないでください」というような祈りは聞いたことがなかった。あれは一体何なのだ？いや、そのような人間を造り出すイエスという存在は一体誰なのか…。私はイエスの敵だった。イエスはこの私をも赦すのか？この私をなお受け入れる大きい神なのか？俺は間違っていたのかもしれない。そんな思いが彼の心に「求道」の問いになったのではないのでしょうか。パウロは、「剣」に打たれたのではなく、「光」に打たれて悔い改めに導かれたのです。神は彼を滅ぼしません。むしろパウロは真の解放を体験しました。彼は後に語っています。「文字は(つまり律法は)人を殺し、霊は人を生かす」(コリント二 3:6)。「生きているのは、もはや私ではありません。キリストが私のうちに生きておられるのです。私が今、肉において生きているのは、私を愛し、私のために身をささげられた神の子に対する信仰によるものです」(ガラテヤ 2:20)。彼は、この信仰を<与えられた>のです。切磋琢磨して修行した末に獲得したわけではありません。ギフト<神様からの贈り物>です。私たちは皆、自分自身を救う神の真実に触れた時、それがただ神様からの贈り物だと知りますよね。

パウロは思ったことでしょう。これからはもう自分自身にこだわらなくていいのだ。自分自身にこだわる事、それは罪の言いなり、罪の僕・奴隷でしかなかった。そして自分もまた他者をも傷つけてきた。でも今、私は「キリスト・イエスの僕」とされた。…そこから何が変わってくるのでしょうか？イエス・キリストの隣みの物差しで人を見ることが出来るようになるのではないのでしょうか。もともと律法が最も大切なこととして挙げた二つのことはそのことです。神を愛することと、隣人を自分自身のように愛すること。それは、神と人間を徹底的に愛し抜かれたイエス・キリストを信じる信仰において実現します。そこに、主にあって隣人との「交わり」が生まれます。今、この礼拝も「交わり」です。決して聖書講演会ではありません。福音というボールがあって、そのボールを私たちは受け取り合って、「ああ、本当にそうだね」「本当に素晴らしい恵みですね」って、イエス様が下さる慰めや、また励ましに共に与かっているのだと思うのです。「神はその独り子をお与えになったほどにこの世を(私たちを!)愛して下さった。独り子を信じる者がひとりも滅びないで永遠のいのちを得るためである」。有名なヨハネ 3:16 の御言葉は、教会の大黒柱ですね。この柱があれば教会は倒されない。いえ、逆に言えばこの御言葉が教会を支えていると言っていると思います。そうです、「一人も滅びないで」。これが神様の御心です。ロマ書でパウロも同じことを言っているじゃないですか！「わたしは福音を恥としない。福音は、ユダヤ人をはじめ、ギリシア人にも、信じる者すべてに救いをもたらす神の力だからです。福音には、神の義が啓示されていますが、それは、初めから終わりまで信仰を通して実現されるのです」。全ての人を招く神様の救い。それは、受け取る私たちの信仰を通して実現してゆきます。ボールは既に投げられているんです、神様から。背を向けたら受け取れません。正面から聴き、こぼさないように受け取ろうとする時、神様と私たちは繋がります。私たちと神様が繋がると、それはぶどうの枝のように広がってゆきます。だからパウロはまだ見ぬローマの教会の人々に向かって言いました。

「わたしは、御子の福音を宣べ伝えながら心から神に仕えています。その神が証してくださることですが、わたしは、祈るときにはいつもあなたがたのことを思い起こし、何とかしていつかは神の御心によってあなたがたのところへ行ける機会があるように、願っています。あなたがたにぜひ会いたいのは、“霊”の賜物をいくらかでも分け与えて、力になりたいからです。あなたがたのところ、あなたがたとわたしが互いに持っている信仰によって、励まし合いたいです。」(1:9～12)。—「励まし合いたい」っていいですね。教会の交わりは一方通行じゃないですね。今日の週報に書かせて頂きましたけれども、交わりは「キャッチボール」みたいなものですね。週報に引用した、直木賞作家重松 清さんの「キャッチボール日和」の中の文章、いいと思いませんか？

「今日みたいなキャッチボール日和には、世界中のみんな、優しくなれたらいい。戦争してる人も、あくどいことをしている人も、絶望している人も、セコいことを考えている人も、病気の人、貧しい人も、大金持ちの人、強い人も弱い人も、いじめっ子もいじめられっ子も、みんなグローブをはめて、ボールを持って、一番たいせつな人とキャッチボールをすればいい。たいせつじゃない人ともキャッチボールをすればいい」。

僕は、変な言い方ですが、この地球が丸い天体であるように、与えられた信仰も、丸いものだと思うのです。角がないから受け取りやすい。怪我をしない。そのお互いの信仰を受け取り合って、慰めと励ましを頂く。礼拝堂の正面左側にかけている詩編の聖句<詩編 133 編「見よ、兄弟が共に座っている。何という恵み、何という喜び」>は、本当に教会に与えられた喜びだと思います。そして、私は<共にキャッチボールをする。何という恵み、何という喜び！>とも言いたいです。

私は、先日思いがけず、加藤先生から素晴らしいプレゼントを頂きました。川越教会の皆さんの週報の『コラム』を集めたバインダーです。加藤先生の手作りで、本当に恐縮してしまいました。6年間ほどの皆さんの手記が収められていました。これは今後何度も読ませて頂きたいと思ひますし、今、読んで思いました。「主は生きておられる。皆さんお一人ひとりの人生の中に、そしてこの教会の交わりの中に！」。ローマの信徒への手紙の「互いに持っている信仰によって励まし合いたい」という今日の聖書箇所にも相応しいと思ひましたので、『コラム』の中から幾つかを、お時間の関係で、抜粋でご紹介させて頂きたいと思ひます。

1) M・Iさん

今年母が亡くなって30年たち、久しぶり兄弟が集まりお墓参りをしました。母は生前キリスト教墓地を用意し墓石に刻む聖句を決めるために何度も開いていました。もうこの言葉しかないと思ったのが詩編 40:5 でした。「わが神、主よ、あなたのくすしいみわざと、我らを思うみ思いとは多くてくらべうるものはない」。当時はあまり感心しなかったのですが、この言葉は母が私に伝えたかったことだとも感動しました。…私が今日まで教会生活を続けてこられたことは、一つは「命綱」であった母の祈り、もうひとつは若い日に目白ヶ丘教会で熊野(ゆや)先生の力強い説教を聴くことが出来たことです。特に心に残っている話は、先生が若い日にクリスチャンを見て、わざわざ教会員になることもないと思っていると、「クリスチャンの信者になれと言っているのではない。キリストの信者になれと言っているのだ。目の付け所が低いぞ」と先輩から厳しく叱られて入信を決心した由。今でもはっきり思い出します。私の罪のために十字架にかかられたイエス・キリストを信じる信者として、新しい年も十字架の上のキリストを見上げて教会生活を続けていきたいと思ひます。

2)別の M・Iさん

僕は2月2日に川越教会でバプテスマを受けました。その時とても不思議な体験をした。水に入ったほんの一瞬の間に、両親、姉の喜びに満ちた笑顔を見ました。まるでこの時を祝福してくれているように。そして水から上った時には、今まで見ていた景色がとても新鮮に見えました。…先日大井教会の加藤誠牧師に、僕がバプテスマを受けることを伝えると、その事を週報に載せて下さいました。「だれも暗闇にとどまることがないように、私は光として世に来た」(ヨハネ12:46)の聖書の言葉と、ここには「人間の持つ闇に閉ざされてきたMさんの人生に光を照らすために来た方が示されている」と書かれていました。今まで暗闇の中にいると思っていたことが嘘のようです。2月2日を境に僕は生まれ変わりました。…これからもイエス様と共にその歩みを歩めることに感謝し、日々を過ごしていきます。同じ苦しみを持った人たちと手をつなぎ、あしたの光を信じて。

3) K・Kさん

2012年1月29日付、磯部信之兄のコラムを噛みしめつつ読み返した。抜粋しますと、
「毎日毎日の感謝が重なり一年が過ぎて行った。自分の生活を「どこを切っても恥ずかしくない自分であったか？」と問われると全く自信がない恥ずかしい自分ばかりが出てくる。私はそういう問いよりも、毎日毎日一瞬一瞬の感謝と信仰の積み重ねが大切だと思った。いつの間にか「後期高齢者」の仲間入り、人生の第4コーナーに差し掛かる。「夕べ雲焼く空を見れば」の聖歌が浮かんでくる。業止むる時の近きいまであるからこそ、「神の前にわれいそしまん」一年でありたい」と。…磯部兄は誰にも別れを告げることなく旅立って行かれました。いつも後藤姉と礼拝・祈祷会に出席され、静かに自分の席を暖めていたお姿が昨日のようです。教会の姿は、咲き誇る花から新緑へと変わり、新しい年度へと教会の歩みに移されました。教会にとって一番大切なことは何だろうか！神様が喜ばれ、集う一人一人が喜びに満ち、希望に満ちる教会はどうやったら造れるのだろうか！磯部兄のコラムを噛みしめつつ、自問します。今自分にできることは何だろうか！と問えばそれは「祈り」です。苦難にある友を、教会の一人一人を、懐かしい友を、家族を覚えて祈ることです。祈りつつ、自分探しの一年でありたいと願うものです。
「求め続けなさい。そうすれば与えられる」。(マタイ7章7節)。

…まだまだ素晴らしいお証しが沢山あります。何と励まされることでしょうか！<ローマの教会>ではありませんけれども、本質的には全く一緒であるこの川越キリスト教会に、「キリスト・イエスの僕」として、この者も加えて頂きました。心から感謝しています。

今日この後で一緒に歌いたいと思って選ばせて頂いた讃美歌は、ベートーヴェンの交響曲第九番のあの「喜びの歌」のメロディーです。ベートーヴェンもキリスト者でありましたし、あの第九の合唱で歌われるシラーによる詩<歓喜に寄せて>も、福音のメッセージを基盤にしながらかいた、という文章を読んだことがあります。

「喜びよ、汝が恵みはこの世のならわしが隔てたものを再び結びつける。汝の優しい翼のもとで、すべての者は兄弟となる」。

—新生讃美歌92番、と一緒に心から讃美したいと思います。

ひと言お祈り致します。

主なる神様、あなたの一方向的な恵みを心から感謝します。

「私は福音を恥としない」。そうです、私たちはこの福音に生かされているからです。私たちは皆等しくあなたから愛され、そしてこの世へとまことの希望を伝えるべく遣わされているものです。あなたと繋がり続けさせてください。今、試練の中にある友を、特に覚えて下さい！あなたは生きておられます！復活の主の御名によって祈ります。

アーメン。